

ホオジロガモ

Bucephala clangula

カモ科・冬鳥



ホオジロガモ (オス)

名前の由来

オスの頬に白い斑があるカモだから。古くは「てこがも」とも呼ばれ、これはかわいい少女(てこ)のようなカモの意味。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：頬白鴨

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

特定種

該当なし

形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)45cm。

オスの頭部は三角形で緑色光沢のある黒、くちばしの基部近くに丸い白斑がある。背、腰、上下尾筒(尾の付け根付近)、尾が黒く、肩の羽は白い。下面はほとんど白色。飛行時に雨覆(翼上面中央から前面にかけての羽)の白と風切(翼の後縁の羽)の黒とのコントラストが明瞭。くちばしは黒く、足は橙色。

メスは頭部が褐色で白い首輪があり、背面は褐色、下面が灰褐色。くちばしは黒くて先端が橙色。目はオスメスとも金色。

声：日本にいる冬の間にはほとんど鳴くことがない。その代わりに、飛んでいるときの羽音に特徴があり「フィフィフィ」という細かな音が連続する。繁殖地である北ヨー

ロッパでは「チャッピー」あるいは「ビィビィー」と鳴くという。



撮影：叶肉拓哉

ホオジロガモ (メス)

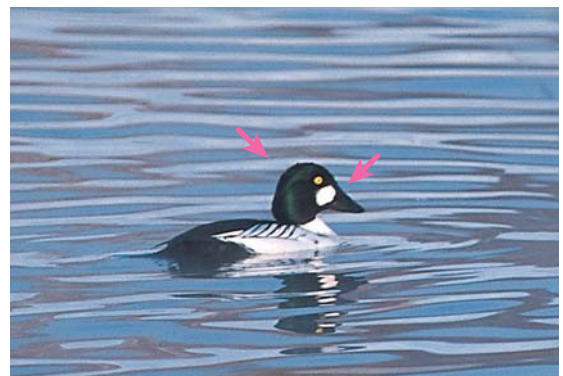
生息環境・分布

大きな河川、湖沼、池、河口、砂浜海岸などに生息する。十勝には10～4月にくる冬鳥。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸の低緯度地方に渡ってすごす。日本では、冬鳥として北海道、本州、四国、九州で見られ、本州北部と北海道に多い。

北海道では冬鳥。沿岸海域、河川、湖沼に飛来する。かなり内陸の河川にも飛来することがある。

十勝では冬鳥として10月ごろに飛来。沿岸海域や河川、湖沼で越冬する。



ホオジロガモ。「頬」の白はもちろん、目の金色も印象的。英語名はGolden Eye

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
ユーラシア高緯度(繁殖期)												

食性・他生物との関わり

軟体動物、甲殻類(エビやカニなど)、昆虫の幼虫、小魚などのほか、水草の種子・根・茎・葉、水藻なども少し食べるという。

水中に潜ったり、水面でグチャグチャくちばしを浅い水に

入れて動かしたり、逆立ちして水底から捕ったりといろいろな採餌の仕方をする。水底や水中を泳ぐといい、深さ1～4mぐらいのところへ10～20秒ほど潜水する。

猛禽類などに捕食される。

繁殖生態

日本では基本的に繁殖を行わず、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方で繁殖する。

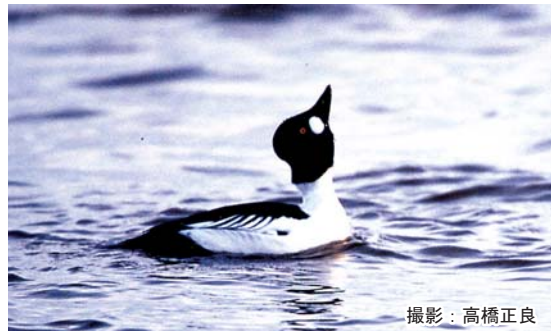
繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。

つがいは冬に作られ、早ければ9月、2～3月につがいのピークを迎える。1～2羽のメスをめぐって数羽のオスによるグループディスプレイ(誇示のための行動・動作)が行われる。(→興味深い話の項)

巣は樹木や人工物の地上1～5mくらいにある穴や割れ目の中など様々な洞穴を利用して作られる。浅いくぼみにいくらかの内装を入れ、綿羽が敷かれる。もっぱらメスが作るという。

8～11個の卵が産まれる。産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱き、29～30日くらいでヒナがかえる。

ふ化後ヒナの体が乾くとすぐ巣を離れ、歩いて水辺に出る。メスのみがヒナの世話をし、57～66日くらいで独立するという。



撮影：高橋正良

ディスプレイ(求愛行動)をするホオジロガモのオス

興味深い話

■身が軽いため、ほんの少しの助走で水面から飛び立つことができる。

■冬に行われるつがい形成のグループディスプレイでは、オスは盛んに頭を上方に向けて反り返り、後頭部が方の背面につくほど曲げ、次に斜め上方にのぼしながら上半身を水面に起こす、という動作を行うという。(→繁殖生態の項参照)

■越冬地では日中はつがいや単独、集まっても小さな群れで過ごしているが、夜には集まって休み、数百羽になることもあるという。

■繁殖地の選択幅は比較的狭く、南部の森林ステップと北部の森林ツンドラにはさまれた地域に限られるという。高木となる森林と、湖水、池、河川などの水域とが組み合わさった場所である。これは水域で採食し、樹林に巣を作るためだと言われる。

■ヒナは卵からかえってすぐ、メス親とともに巣から離れ

るが、営巣場所によっては水辺に出るまで1.5～2kmも歩くことがあるという。

■十勝地方のアイヌ語ではホオジロガモを「エアウ」といい、カモ類一般(特にマガモ)を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



ホオジロガモ(左上)。オオハクチョウ(手前2羽)や他のカモ類と冬を過ごす(帯広川下流部)

配慮事項

底生動物の豊富なやや水深のある水域が必要。

参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004
「コタン生物記Ⅲ 野鳥・水鳥・昆虫篇」更科源蔵・更科光、法政大学出版局 1977

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ